

英語の主語の人称代名詞の省略と丁寧表現についての一考察

藤原 正道
Masamichi Fujiwara

要旨

本論の目的は、英語の主語の人称代名詞の省略と丁寧表現の関係を明らかにすることである。英語もある条件が揃えば、人称代名詞を省略することが可能であるが、聞き手への丁寧さを表す場合は、人称代名詞は省略できないことを明らかにする。

本論では、英語話者は事態を客観的に把握するという認知的意味論の理論を基盤とし、常に発話者と聞き手が存在する会話を資料として分析を行う。

1 はじめに

本論の目的は、英語の主語の人称代名詞の省略と丁寧表現についての関係を明らかにすることである。Quirk, et al. (1985)では英語の省略の条件について示されている。その一つが聞き手の復元可能性であるが、丁寧表現の場合は復元可能性が高くても人称代名詞の省略は生じないことを本論では明らかにしていく。

本論の分析には、池上 (2003/2004)の客観的事態把握の概念を基盤として、発話者と聞き手の会話の分析を行う。

また、資料として米国TVドラマ*West Wing* (1999-2006)と*Joey* (2004-2006)の会話を用いる。*West Wing*は米国ホワイトハウス内部を描いたドラマ。一方の*Joey*はハリウッドのアパートを中心にしたコメディである。

2 先行研究

会話中の英語の主語の省略については、Quirk, et al. (1985)で「状況省略 (Situational Ellipsis)」として扱われ、澤田 (2016:35)で次のようにまとめられている。

(1) 陳述文においては、

- a 一人称代名詞の状況省略は、主として、認識動詞などで発生する。
- b 二人称代名詞の状況省略は、原則として、発生しない。
- c その他の主語代名詞およびthereの状況省略は、復元可能性が高ければ発生する。
- d 第一助動詞が主語代名詞と縮約可能ならば、ともに省略される。
- e 第一助動詞が縮約不可能なとき、第一助動詞は単独で残る。

(2)疑問文においては、

- a 一人称代名詞の状況省略は、原則として、発生しない。
- b その他の主語代名詞およびthereの状況省略は、復元可能性が高ければ発生する。
- c 第一助動詞が主語代名詞と縮約可能であれば、ともに省略される。ただし、主語に強勢があるときは、第一助動詞は消えても、主語は残る。

著者が前述の米国TVドラマを調査したところ、以下の表1のような結果になり、(1)(2)のQuirk, et al. (1985)の指摘と一致する。

表1

<i>West Wing</i>	129例	共起する動詞	比率
I	39例 30%	can't/couldn't	12例 31%
		am sorry	12例 31%
		don't/didn't know	7例 18%
Do you	31例 24%	want	15例 48%
		know	9例 29%
It/That	25例 20%	助動詞	5例 20%
		否定	4例 16%
		sounds	3例 12%
		Is-ing	2例 8%
S/he	9例 7%	否定	5例 56%
		Is-ing	2例 22%

<i>Joey</i>	21例	共起する動詞	比率
I	6例 29%	am sorry	5例 83%
Do you	6例 29%	want	6例 100%
It/That	7例 33%	助動詞	1例 14%
		否定	2例 29%
		sounds	2例 29%

しかしながら、一方で表2のように発話者から聞き手への丁寧さを示す表現では、省略されない主語の人称代名詞が存在する。

表2

<i>West Wing</i>	34例
I	6例 18%
you	21例 62%
It	2例 6%
We	2例 6%

<i>Joey</i>	5例
I	3例 60%
you	2例 40%

澤田(2016:39)は「話し手と聞き手が「互いに了解しているところ」は伝達されるべき内容でなく、伝達の際に機能語で構成される部分である。典型的な状況省略が機能語部分に起こるのはこのためである。」としている。

発話者と聞き手がお互いの顔を見合わせて発話しているにもかかわらず、表2のように丁寧表現では、人称代名詞の省略は起こらない。次の3章では表2の例について分析し、状況省略とは異なり、丁寧表現では主語の人称代名詞を省略せず、あえて明示する必要があることを示す。

3 省略されない人称代名詞

3.1 一人称

澤田(2016:50)によると、「陳述文の一人称代名詞の省略は話し手が心理的に打ち解けた場面で発生しやすいので、聞き手との心理的な距離を縮める効果と関係しているようである。」と分析している。では、次の例を見てみよう。

- (3) a I was hoping we could intercede without involving him.
b I was hoping you could speak to the vice president.
(4) a I was hoping you could stay. Maybe we could hang out.
b I was hoping you could show it to some of your clients.

(3)は*West Wing*、(4)は*Joey*からの例である。(3)はそれぞれ、(3a)は次席補佐官が軍司令官に、(3b)は広報部部长が大統領に職場であるホワイトハウス内で発言しており、打ち解けた場面とは言いがたい。一方(4)の場合は、(4a)は弟が姉に、(4b)は隣人どうしの会話であり、こちらはプライベートな打ち解けた場面と言える。加えて、*was hoping*という一定過去進行形という形式も存在している。にもかかわらず、主語の一人称代名詞Iは省略されていない。

(3)(4)はそれぞれ場面の違いはあるが、共通するのはこれらの例が単なる陳述ではなく、発話者Iから聞き手youへの依頼という点である。動作主の主語Iが希望していることを聞き手に受け入れてほしいことを示している。

池上(2003/2004)が示すように、英語話者は事態を発話者自身も別の場所から眺めているかのような客観的事態把握をするので、事態全体を把握しやすい。つまり、表現上省略したとしても、動作主Iが動作の対象であるyouへの依頼を表していることは変わらない。

一人称主語を省略することにより、発話者は打ち解けた心理状態を作ろうとする一方で、動作の対象者の聞き手は依頼される側であり、心理的負担も負わされることになる。依頼の場合はむしろ一人称代名詞を省略せずに、(3)(4)のような過去進行形を

使ったり、次の(5)の*West Wing*で広報部長が大統領の娘に発言している例のようにWeを使って、発話者と聞き手が事態に対して心理的に等距離であるかのような印象を与える方が、丁寧な表現と言える。

(5) We're wondering if we can pull some things.

今回の2つのTVドラマでは、Weを省略する例は観察できなかった。もし、Weの省略は少数だとすると、お互いに了解している部分、つまり意識しない部分とは逆に、Weは発話者と聞き手の両方をあえて意識させるので、省略されにくいと言える。

このことは次の(6)にも当てはまる。

(6) Could we have a minute, sir?

この例は*West Wing*の中で次席補佐官の大統領への発話である。発話者の聞き手に対する依頼にもかかわらず、聞き手にのみ心理的負担がかからないようにWeを用いて、聞き手と発話者の両方から心理的に等間隔な内容であるかのように示し、さらに疑問文の形式で依頼の決定権は聞き手にあることを示して丁寧さを表している。

さらに、次の(7)は*West Wing*からの例で、それぞれ秘書が上司に、大統領がスタッフに発している。これらは聞き手に対する許可や依頼で、発話者の希望を聞き手に受け入れてもらうことが目的である。

(7) a May I use your computers?
b Can I have the room, please?

(7)の例のような疑問文の一人称主語が省略されないのは、聞き手に対して単純な質問をしているのではなく許可や依頼を表し、Iを明示することで対象の事態に対して聞き手より動作主である発話者の方がより心理的距離が近いことを示し、聞き手への負担を少なくしているからである。

3.2 二人称

表1のように二人称主語の陳述文での省略は今回観察できず、疑問文でのみ観察できた。しかしながら、疑問文形式でも表2のように省略されない二人称主語の例も多数存在する。これらは一人称の場合と同様、聞き手に質問しているのではなく、発話者が丁寧に依頼している場合である。次の(8)の例を見ていこう。

- (8) a Could you have someone bring some Schweppes Bitter Lemon and a copy of the constitutional order of succession?
b Mr. President, could you point me in the right direction on something?
c Would you state your full name, please?

これらは *West Wing* からの例で、それぞれ (8a) は大統領が個人秘書に、(8b) は広報部長が大統領に、(8c) は判事が首席補佐官にそれぞれ依頼をして発話者の要求を聞き手に受け入れてもらおうとしている。

一般的に次の例のように *Would you* より *Could you* の方が、聞き手への丁寧度が増加する。

- (9) a Will you open the door?
b Can you open the door?
c Would you open the door?
d Could you open the door?

(9a) から (9d) になるにしたがって、丁寧度が増加する。これらの例から助動詞と *you* を省略してしまうと、聞き手は失礼な *Open the door?* という命令形式を受け取ることになり、丁寧さという発話者の意図が全くなくなってしまう。復元可能性もかなり低く、聞き手へかなりの心理的負担がかかる。よって、これらの場合は (8) の例のように人称代名詞の省略ができなくなる。

また、*mind* を用いた表現も *West Wing* には多く見られた。

- (10) a Would you mind terribly if I changed the channel to CNN for a minute?
b Would you mind calling CJ for me?
c Would you mind reading it and then hitting me with a fairway wood?

(10a) は広報部部長が他の客に、(10b) は広報部部長が秘書に、(10c) は広報部次長が大統領私設秘書に対する発話である。これらの *Would you* の部分を省略しても *mind (if) …* という一定の形式は残るので、聞き手側の復元可能性も高いはずである。しかし、主語の省略の例は *West Wing* で2例のみであった¹⁾。

二人称主語を省略しないのは、上記 (8) の例のように疑問文の形式をとりながら、発話者の要求を聞き手へ依頼している丁寧表現に理由がある。

(10) の例はそれぞれ、発話者の聞き手への要求で、主語つまり動作主を *you* にして、さらに疑問文形式にすることにより、発話者の要求を受け入れるか否かの選択権は聞

き手の側にあることを示している。したがって、一人称主語の場合と同じように聞き手の二人称の *you* をむしろ明示する方が、発話者と聞き手の内容に対する心理的距離が等しくなり、発話者の丁寧さを表すことになる。

(10) の例を *Mind (if) …* で始めた場合、聞き手は発話者が省略したのは *Do you* なのか *Would you* なのかは簡単には復元できない。*Would you* の方がより丁寧だと考えられるので、依頼の場合、丁寧な方が聞き手も聞き入れやすいことから考えても、助動詞と二人称主語を省略するのは得策とは言えないⁱⁱ。

また、*Do you* を省略すると、打ち解けた感じになり、発話者と聞き手の心理的距離感は近づくことは確かであろう。しかしながら、表1のように省略されている *Do you* に共起する動詞の中で *want* が多いのは、聞き手の欲求を尋ねている場合であり、聞き手にとって利益があることで、発話者の要求や依頼ではない。次の例も見てみよう。

- (11) a Hey, sweet mama. You wanted to see me?
b You wanted to see me?

これらは *Joey* からの例で、両方とも役者からプロデューサーへの発話である。*want* を使った疑問文形式なので、表1の数値からしても二人称主語の *you* を省略可能のはずである。しかしながら、これらの例は *wanted* という過去形を用いて、聞き手への丁寧さを示しているので、あまり打ち解けた感じではなく、*you* を省略していないⁱⁱⁱ。

つまり二人称主語の省略は、発話者と聞き手の心理的距離を縮めるが、聞き手への依頼や要求をする場合は、可能な限り聞き手に心理的負担をかけず、発話者と聞き手が内容に対して心理的等距離にあるように表現するのが丁寧な表現である。

英語の場合、日本語と異なり第三者へ丁寧さを表すことはないので、*S/he* を省略しない丁寧表現の例は観察できなかった。*It* については、*West Wing* から次の2つの例が観察できた。

- (12) Seems to me the last time we were here we didn't do well.
(13) Would it be possible to move the press off the church grounds?

(12) は広報部部長が大統領へ、(13) は大統領が首席補佐官への発言である。非人称代名詞の *it* は、発話者と聞き手を動作主にするのを避けて丁寧さを表すために使用される。

これらの例では seems (that) や possible to などの復元可能性の高い構文なので it を省略しやすく、聞き手への丁寧さも損なわれない。(13) では Is it possible より Would it be possible の方がより丁寧なので、やはりあえて省略していないと考えられる。

4 まとめ

英語の主語の人称代名詞の省略と丁寧表現の関係について考察を加えてきた。英語でも主語を省略できる場合は存在する。大前提として発話者と聞き手が直接会話していることが重要であり、その場にそれぞれの存在を確認できるからこそ、既存の情報を省略することが可能である。しかしながら、文法機能的な問題だけでなく、発話者の聞き手に対する心理的距離も含まれている。発話者と聞き手の情報の交換だけでなく、聞き手への丁寧さが示される場合、主語の人称代名詞の省略は不可能になることを示した。

参考文献

- 藤原正道(2013)「人称代名詞と英語と日本語の丁寧表現の分析」『実践女子短期大学紀要』34号, 59-68.
- 井出祥子他(1986)『日本人とアメリカ人の敬語行動: 大学生の場合』南雲堂.
- 井出祥子(2006)『わきまへの語用論』大修館書店.
- 池上嘉彦(2003)「言語における<主観性>と<主観性>の言語的指標(1)」『認知言語学論考No.3』山梨正明他(編), 1-49. ひつじ書房.
- 池上嘉彦(2004)「言語における<主観性>と<主観性>の言語的指標(2)」『認知言語学論考No.4』山梨正明他(編), 1-60. ひつじ書房.
- Langacker, Ronald W. (2008) *Cognitive Grammar: A Basic Introduction*. Oxford University Press.
- Leech, Geoffrey N. (1987²) *Meaning and the English Verb*. Longman.
- Leech, Geoffrey N. (2014) *The Pragmatics of Politeness*. Oxford University Press.
- Quirk, Randolph, Greenbaum, Sidney, Leech, Geoffrey and Jan Svartvik. (1985) *A Comprehensive Grammar of the English Language*. Longman.
- 澤田茂保(2016)『ことばの実際1 話しことばの構造 シリーズ英文法を解き明かす現代英語の文法と語法⑨』研究社.

注

- i (1) a Mind if I split some water with you?
b Good evening, sir. Mind if I take a quick look?
それぞれ、副大統領が大統領に、警護官が広報部部長に対する発話。
- ii *West Wing*には次のような例も見つかった。
(2) a You don't mind if I change everything?
b You mind if I talk to you while we walk?
これらは一般的な疑問文形式より、丁寧度が低下すると考えられる。
- iii 過去形を用いて丁寧さを示す例は次のとおり。
(3) A: Did you want me?
B: Yes, I hoped you would give me a hand with the painting.
(Leech (1987²:15))

Abstract

The aim of this paper is to clarify the relationship between the ellipsis of personal subjects and the politeness in English. I will clarify that it is impossible for the politeness to omit the subject of the personal pronoun in English.

My analysis is based on the concept of the objective construal in English. I apply the idea to the analysis of the ellipsis of personal subjects in the conversation between the speaker and the hearer.